

聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

第12章 祈りについてのパウロ その2①



序章

神をもっとよく知るために祈る



パウロの祈りは、自分自身の体験から生まれていました。神を追い求めることを通じて深く学んできていたことが、諸教会のための祈りへの情熱となったのです。「真に祈る人物は、祈りなしに得られるよりも鋭い洞察を得る。そして、さらに冷静な判断に至り、さらに知的な計画を編み出し、さらに優れた形で状況を把握し、さらに創造的な形で人々との関係を保つところとなるのである」。祈りにおいて際立っていたがゆえに、パウロは、証し人としても説教者としても、優れた人物であったのです。

パウロがなぜ書簡に祈りを含めているのかについては、疑問の対象となることもあるかもしれませんが、それが読者に自分の献身や霊性を見せつけるべくなされたものでないことは確かです。また、単に書簡の紙面を埋めるためでもありませんでした。パウロは、読者個々人ではなく全体に宛てて手紙を書いていました。そのため、読者たちのために祈るという規則的な習慣が、自然に奨励や激励を伴うものとなったわけです。私たちが思い起こすべきことはまた、彼がこれらの手紙を、聖霊の靈感のもとで書いたということです。聖霊は彼を導かれ、これらの祈りを、神があらゆるクリスチャンに知っていて欲しいと願われる教えの一部として、含めるようにされたのです。パウロの模範を通して、私たちは、神の臨在そのものに確信を持って、入る方法を学ぶことができます。パウロの祈りはまた、神の民にみこころが啓示される助けにもなっています。さらに、真似るに価する祈りの型を提示してくれてもいます。パウロの祈りを学び、それらの祈りの精神へと立ち入っていくと、それらを、パウロとともに意味ある形で祈っていくことが可能になるのです。

記録されているパウロの祈りを祈ることにより、私たちは神に自らの存在の最も深い部分を表現することができます。ダイナミックで美しいこれらの祈りは、全く新たな世界へと私たちを導き入れてくれます。また、永遠の深みを垣間見せてくれると同時に、私たちをキリスト教体験の平凡でありふれたレベルから神の啓示の高みへと移してくれるのです。素晴らしい祈りの歩みを願うクリスチャンであれば誰もが、パウロの祈りを暗唱し、日々のデボーションの一部とするのが賢明です。



神をもっとよく知るために祈る

エペソのクリスチャンたちのためのパウロの祈り（エペソ 1:15-21）は、神の、ご自分の子どもたち一人ひとりに対する最高のみこころを表現したものとなっています。この箇所とこの書簡の後のほうに出てくる箇所においてパウロは、エペソの人々が、聖霊の助けによって信仰面で強く成長していくようにという祈りを（エペソ 3:16 参照）、素晴らしい熱意をもって祈っています。私たちはみな、互いのために祈る必要があります。一人ひとりに聖霊の素晴らしいお働きがありますようにと祈るのです。

こういうわけで、私は主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛とを聞いて、あなたがたのために絶えず感謝をささげ、あなたがたのことを覚えて祈っています。どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。（エペソ 1:15-21）

「こういうわけで」という導入部分で、パウロは先行する何節かに言及していますが、そこにはキリストによりクリスチャンのものとなっている霊的な祝福が三つ含まれています。一つは「この方であって私たちは、その血による贖い、罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです」(7節)というものです。第二は、「この方であって私たちは御国を受け継ぐ者ともなりました。みこころによりご計画のままをみな行う方の目的に従って、私たちはあらかじめこのように定められていたのです」(11節)というものです。第三は、「この方であってあなたがたもまた、真理のことは、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました」(13節)というものです。贖われ、神に讃美を捧げるために選ばれ(12節)、約束された聖霊を受け取る者とされた——これらはパウロがエペソのクリスチャンに、理解し、それに基づいて行動して欲しいと考えた真理なのです。

パウロが祈っているエペソのクリスチャンたちはおそらく、かつては女神アルテミスを礼拝する人々であったことでしょう（使徒 19:23-24 参照）。かつて異教徒としてこの女神を拝んでいたことは疑いありません。しかし、彼らは完全に変えられており、「**私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父**」（17 節）へのパウロの篤い祈りは、彼らの目にどれほど対照的なものに見えたことでしょうか。私たちも同じです。自分たちの祈る神については、靈感を受けた聖書記者たちの呼びかけるままのお姿に従って認識するのがいいでしょう。

ところがほどなく、私たちは一つの奥義のようなものに直面します。イエスご自身は神ではないのでしょうか。聖書がそれを宣言しているのは疑うまでもありません（マタイ 1:23, ヨハネ 20:28, ヘブル 1:8 を参照）。しかし、イエスはまさしく神の御子であり、それゆえ神ご自身であるとはいえ、同時に人の子でもあり、それゆえ神でもあり人でもある方です。すなわち、イエスはご自身の内に、神としての完全なご性質と、人としての完全なご性質とを、互いに妨げの無い形で有しておられるのです。イエスが父なる神に祈っておられたのは、この人間としての観点からのことでした。人間としての基準に身を置かれたことにより（ピリピ 2:5-8 参照）、イエスの祈りは必然的に人間の基準においてのものとなったのです。

祈りを捧げている対象である方がいかなる方であるかをはっきりとさせた上で、パウロは「栄光の父」（フィリップ訳では「あらゆる栄光に満ちた父」）と語り、神のご性質の確認へと移っています。「栄光」とは、単なるまばゆさや明るさ以上のものであり、その本質、性質、存在など、神が神であられるすべてを含むものです。神に栄光を帰するというのは、神が有しておられないものを現すということではありません。神が正当に有しておられるもの（イザヤ 42:8,12 を参照）を認めるということなのです。「栄光」とは、神の決して完全には理解できない本質なのであり、神を、ただ讃美するにふさわしい方にしているものなのです。この神のご栄光を、限られた程度だけでも感じるならば、その人の祈りはまったく新しい次元に導き入れられるようになります（出エジプト 33:18-34:8 を参照）。この完全なる栄光に満ちた神に対し、そしてこの神のみに対し、パウロは自らの願いを告げているのです。彼は、自らの腹の底からの願いに対し、神こそが確かに応答できる方であることを知っていたのです。

エペソのクリスチャンのためのパウロの祈りは、簡単な言葉で要約することができます。それは、「神さま、彼らが理解できるようにしてあげてください」というものです。パウロ自身が、この祈りに見られる心の重荷を表現しています。人の体験と重荷には一定の関係を見て取ることができます。パウロは、自分が体験したことを、他の人たちにも体験して欲しいと考えていました。彼は「**知恵と啓示の御霊**」を通して永遠の現実を知るに至っていました。その心の目には光が与えられており、それによって神の召命の希望、すなわち、神が（パウロを含む）ご自分の民のために思い描いてくださっている資産と、素晴らしいそれらを得るべく与えられている力とを知っていたのです。パウロは、エペソにいる友人たちにも同じ体験をして欲しいと願っていたのであり、神が彼らに「**知恵と啓示の御霊**」を与えてくださるよう、彼らがそれにより、栄光の父をよりよく知ることになるようにと祈っていたのです。

ここで、「霊」という言葉が聖霊を指しているのか、人間の「知恵と啓示の」霊を指しているのかについては、議論が分かれています。どちらの解釈に従うにせよ、人間の霊は、聖霊によって動かされると、知恵と霊的な啓示を体験するものです。人間の精神作用に由来する判断や直感がどれほど優れたものであれ、「知恵」とはそれ

以上のものを意味しています。これは神の知恵であり、例えばイザヤが、やがて来られるメシヤを見たような知恵を指します。「その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である」(イザヤ 11:2)。

知恵が正しい判断をもたらすものである一方で、啓示は正しい知識をもたらします。啓示には、神のものと人間的なものの二つの側面があります。神に関するものとしては、神の領域にのみ存在する知識が明らかになることであり、覆いを取り去られることです。人間に関するものとしては、洞察を司る能力が、そのようにして明らかにされた霊的な真理に適用されることです。エペソの人々にあらゆる知恵と知識、力に満ちた神を紹介したいというパウロの願いが、このような雄弁な祈りを引き出すところとなったのです。

キリストはご自分の教会に、神についてのもっと完全な知識を熱く求める思い、パウロと同じ切なる思いを与えることにより、パウロを鼓舞されたように教会も鼓舞したいと願っておられます。私たちも同じです。全能の神についてのさらに優れた理解と知識を、自分たちと仲間のクリスチャンたちとに与えてくださいと、パウロと同じ心で願う時ほど、神のみこころの内に祈っているのだという確信をいただける時はありません。この知識は、人間の性質として把握できる範囲を完全に超越したものです。「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです」(I コリ 2:14)。しかし、神からのこの啓示は、自ら交わりを持ってくださる神の存在を喜んで認める人なら、誰もがいただくことができるのです。「ところで、私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜ったものを、私たちが知るためです」(I コリ 2:12)。知る人ぞ知るといふ目を与えることができるのは神だけなのです。「まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです」(I コリ 2:9-10)。

言い換えるなら、神のこの知識を得ることは、厳しい精神的な労苦の問題ではなく、A・W・トーザーが注意深く指摘している通りです。「新約聖書の教えによれば、神と霊的な事柄は、つまるところ、魂の内における神の直接の働きによってのみ知られるということである。図表や類推の助けによって神学的な知識がいかにか得られようと、神についての純粋な理解は、個人の霊的な気づきによるものでなければならない。聖霊が不可欠なのである」。



「啓示」という用語は、同様の用語の中でも、特に酷な扱いを受けてきました。その結果、この用語を用いることはしばしば、疑いと不信を醸し出すものとなっています。神からのこの賜物を乱用する人々によって、いかなる分裂が、いかなる悲しみが、いかなる苦悩が、いかなる心痛が、いかなる争いが、いかなる破滅が教会

にもたらされてきたことでしょうか。しかし、山師のような人々が自分たちの目的のために偽物を用いてくるからといって、啓示そのものを拒むべきなのでしょうか。それは絶対に違います。私たちはむしろ、模範とされるべきことを体験できるよう、さらなる努力を重ねていくべきなのです。

それでは、パウロが神に願いを捧げている意図についてはどう理解すべきでしょうか。その意図は、通常の方法によらない形で啓示の知識に至るということです。すなわち、神のみわざによって、聖霊によって、啓示の知識に至るということです。また、私たちの霊的な知覚を聖霊によって鋭いものにしていただき、本物と偽物を見分けられるようになるということです。私たちは本物の啓示をどれほど必要としていることでしょうか。本物の啓示が無ければ、影の中に輪郭が見えるだけです。本物があれば、顔と顔を合わせるかのように見ることができます。本物が無ければ、神についてわかるだけですが、本物があれば、神ご自身のことが本当の意味でわかります。本物が無ければ、神は遠く離れたところにおられるように思われるだけですが、本物があれば、神が栄光にあふれんばかりに近くにおられることがわかるのです。啓示によってこそ、冷たい、死んだ伝統的宗教と、温かい、生きた霊性の違いが明らかになるのです。

「あなたがたが〔訳注：この方を〕知ることができますように」という、さらに明確な語句を見ると、この啓示が奇妙なものや、まがいものである（訳注：すなわち偽物と解釈する）余地はありません。啓示の知識が有効なものであるための範囲は明確に定められているのです。すなわち、

- ① 「神の召しによって与えられる望みがどのようなものか」をあなたがたが知ることができるように、
- ② 「聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか」をあなたがたが知ることができるように、
- ③ 「私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるか」をあなたがたが知ることができるように、ということです。



パウロはしかし、自分の願いをさらに一歩前へと押し出します——「あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって」。心とは、ヘブライ語では内なる精神と理解を含むものでした。私たちの自然な理解は、それだけでは霊的な真理を見きわめたり理解したりすることはできないということです。しかし、聖霊によって目覚めさせられ、はっきりと見えるようになった心であれば、神からの本物の啓示を受けることができるのです。これは、かつては知られていなかったものが、神秘的、オカルト的に明らかになったというわけではありません。これは、みことばには既に明らかにされているにもかかわらず人の霊的な気づきにおいてはまだ理解されていなかった真理が、強調されるということなのです。私たちはみな、様々な理由から、様々な程度の違いにおいて、次のように言われたイスラエルのようなものです。「かえって、今日まで、モーセの書が朗読されるときはいつでも、彼らの心にはおおいが掛かっているのです」（Ⅱコリ 3:15）。あるいは、私たちは、目が「さえぎられていて、イエスだとはわからなかった」（ルカ 24:16）エマオの弟子たちのようなものなのです。

これらの崇高な願いは、どれを見ても、人間の感覚を喜ばせるようなことについては、関心も願望も見出す

ことができません。私たちはそこに、クリスチャンの究極の目標を、神の与えてくださった力によって認識するということの喜びに乱舞する人物の感覚を見るのです。彼はそれゆえ、この啓示された祝福の約束を分かち合いたいと願っているのです。パウロは、他の人々がほとんど見たこともない別の世界を見たことがありました（Ⅱコリ 12:1-4 参照）。それで、他の人々も、栄光に満ちたその光景を、聖霊によって垣間見て欲しいと強く願っていたのです。パウロとともに私たちもまた、これらの目標に向けてどれほど祈る必要があることでしょうか。